

有明海水産資源回復技術確立事業*

ウミタケ浮遊幼生調査

重久剛佑

有明海佐賀県海域におけるウミタケ資源の動態を把握するため、ウミタケ浮遊幼生調査を行ったので概要を報告する。

方法

調査は、令和5年10月14日～12月19日に合計10回、昼間満潮の前後3時間内に図1に示す3定点で実施した。

各定点において、海底直上1mから表層までの水深帯を水中ポンプを用いて500Lの海水を揚水した。揚水後、プランクトンネット（目合75 μ m）を用いて濾水し、浮遊幼生を濃縮した状態で250mLポリ容器に収容した。その後、グルタルアルデヒドで固定して室内に持ち帰り、試料の20分の1量を検鏡し、ウミタケ浮遊幼生の個体数を測定した。なお、130 μ m以下の個体は、他の二枚貝幼生と判別がつきにくいいため、測定個体数には含めなかった。

結果

図2に調査定点別ウミタケ浮遊幼生の出現個体数の推移を示す。

10月14日はSt.1（早津江沖）、St.2（白石沖）、St.3（鹿島沖）のいずれの地点でも浮遊幼生は確認できなかったが、10月25日から浮遊幼生が確認され始め、11月1日～8日には全地点でピークに達した後、減少傾向となり、11月29日まで確認された後、その後確認されなくなった。このように、今年度のウミタケ浮遊幼生の出現個体数が多い時期は昨年度と同時期である11月上旬であった。また、定点別ではSt.3で最も出現個体が多かった。

今年度の各定点における最大出現個体数は、St.1で200個体/m³、St.2で160個体/m³、St.3で640個体/m³と、前年度の最大出現個体数である142～187個体/m³、令和3年度の67～79個体/m³、令和2年度の83～161個体/m³、令和元年度の184～235個体/m³より最大値としては過去最大であったものの、従来と調査手法が異なったことの影響があった可能性がある。

文献

- 1) 野田進治・佃政則(2019)；ウミタケ等適正生息環境調査（ウミタケ浮遊幼生調査），令和元年度佐賀県有明水産振興センター業務報告，p39-40.
- 2) 野田進治・重久剛佑・佃政則(2020)；ウミタケ等適正生息環境調査（ウミタケ浮遊幼生調査），令和2年度佐賀県有明水産振興センター業務報告，p30-31.
- 3) 野田進治・佃政則(2021)；ウミタケ等適正生息環境調査（ウミタケ浮遊幼生調査），令和3年度佐賀県有明水産振興センター業務報告，p28-29.
- 4) 野田進治・佃政則(2022)；ウミタケ等適正生息環境調査（ウミタケ浮遊幼生調査），令和4年度佐賀県有明水産振興センター業務報告，p16-17.

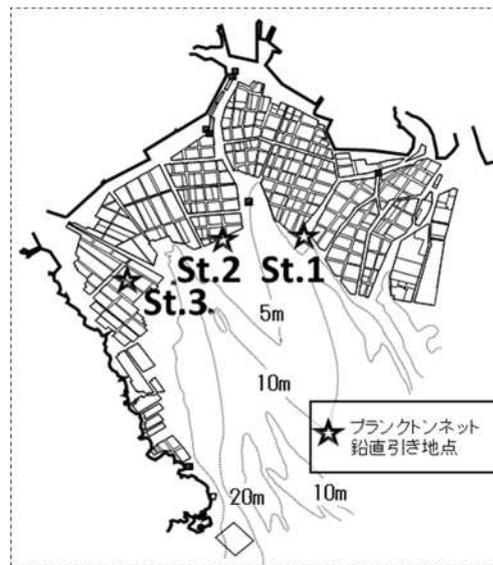


図1 ウミタケ浮遊幼生調査定点

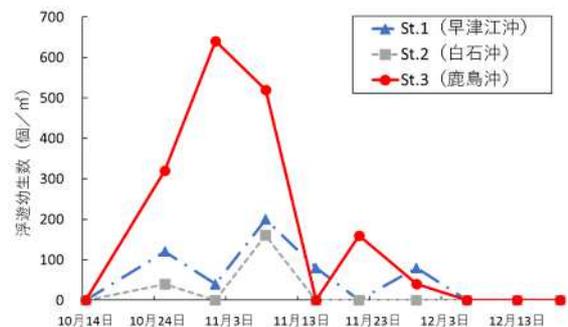


図2 ウミタケ浮遊幼生の出現個体数の推移

*国庫補助事業名：有明海漁業振興技術開発事業